

「併し自分は何と云つても二十七歳の、自覚した、而も一方にそれで立つて行く獨立的な仕事をちやんと持つてゐる一人前の人間である。それ故に十七八の青年が盲目滅法にある女を戀して失戀した場合のやうに、それ一つで玉の緒が斷ち切られたやうな一途の弱りきり方はしないのが當然だ。それにしても自分の意識は餘りに眼覺め過ぎ、自分は生長し過ぎてゐる。併し自分はそれを遺憾には思はない。自分は恐らく若い青年の無垢を缺いてゐたらうけれども、同時にある程度迄生長した男にでなければ出來ないやうな戀を充分に味つた心算だから。そして自分は自分のやうな性質を持つた男には二十七歳は愚か、何時迄たつても眞に純正な戀の出來る本能が枯れ死ぬる時は來ないと云ふことを感じてゐる。人間の天賦は時を超えるると自分は思ふ。」

三月五日の日記にかう書いた。どうく春になつた。

二三日前からSとの戀の顛末に就いて長篇小説を書き出した。

書き出して今更の如く古傷に當つて見ると、又も勃然としてSに逢い度くなつた。で、

自分は彼女に久々で慇懃な端書を送つた。明晩尋ね度いと云ふのである。相不變睡眠劑を常用としてゐる。Sの夢をよく見る。

翌日の晩方彼女の家に行かうとして自家を出ると、殆んど直ぐ門の前に出火があつた。火事を見るく大きくなつたので自分は一寸躊躇した。

「あの中に若しあの人がゐたら……。それこそ俺は什んなに勇んであの人を救い出して來るだらう。」

こんなコンエンショナルなことを自分は焔に包まれて眞赤になつた儘今しも落ちかゝつてゐる一軒の二階家を見乍ら思いつ、微笑んだ。

Sの家の門に着いた時、自分は心の中に「神よ。一眼でもいゝから仕うかあの人に會はせて下さい。」と私かに祈つた。そして比較的落付いた心で中に入つた。Sは自家にゐた。

自分は彼女を一目見た時、恰かも當然此世にゐない筈の人に又も地上で邂逅つたやうな一趣不審な氣がした。そして暫くの間は只呆然として訝かし氣に彼女を見守つてゐた。

現實のSは具合悪げにして、些しでも自分に好意の閃きを見せるのを潔しとしない云ふ處が眼に見へてゐた。しかし自分が餘りに打ち溶けて彼女の態度を些しも意に介せず、感謝と歡びとに充ちた和らいだ表情を以て親しく彼女に對してゐるので、Sも實は和らいでゐるのであつた。そしてうつかり自分に和解の調子を合はせ過ぎる時、それを自分には分に過ぎたことであると云つたやうに齒痒ゆがつてゐると云ふ風であつた。併し自分はそんなことに頓着しなかつた。そして彼女の仕うやら氣まり惡げにして、眞向に自分を見やうとはしない愛くるしい顔の裏に、拗ねたやうな上機嫌の影を認め乍ら一人ではくくくと幸福がつてゐた。

「貴女はまあ一體何うしてゐたんです？」「貴女はなんて親切な有り難い人だ。どうして此私に會ふことを許して呉れたんです？」こんなことを自分は尋ねて見度かつた。しかし自分は何とも云へなかつた。只心から満足を感じてにこくしてゐた。

而も此愛くるしい天使は何となく自分には恐しかつた。自分は五六年以前に嘗て友であ

つたものに對する時のやうに空々しくいらばつて、彼女の近頃の模様や西洋行の話杯を聞いた。Bは任期が了つて二月の末に一人で歸國の途に上つた。そして今度英國に歸ると大尉に昇進するのだと云ふとも聞いた。

「貴女は近頃友達がめつきり減つて嘸ぞ淋しいでしょう。」かう自分が訊ねると、彼女は

「いゝえ、別に。未だ他に友達はゐますもの……。それに近頃は中々忙しいもんで。」と答へた。

彼女に注いで貰つた茶を啜り、綺麗な支那焼の皿に盛られた菓子を摘み乍ら自分は「あゝ俺は幸福だ。幸福だ。全で夢のやうだ。」と心の中に吐いた。

「近頃何して暮してゐるの？」とやがてSは微笑み乍ら訊いた。

「無論勉強してゐます。書きものをしてゐます。本も少しは讀みます。」と自分は答へた。

彼女は「セキ」から白い夏衣の「解きもの」を受けとつて、自分と眞向に應待することの手持無沙汰をまぎらしがてらに、それをほぐし、倦怠るげに自分と談しをした。

「此間旦那夫婦を新橋に送りましたよ。」自分は云ふことがないので止むを得ずこんなことを云ひ出した。

「そうお？——何故？——え？あんな朝早く。」

彼女は「何故？ええ？」と云ふ可愛い、口癖を持つてゐる。自分は此口癖を聞くことが好きであつた。

「貴女には分らない？」

彼女は黙つてゐた。

「何故貴女は今夜私に會つて呉れたの？」自分は又微笑み乍らかう訊いた。

「だつて此酷い嵐に折角此處迄来るんですもの。」

「どうも有り難ふ。——それやそうと此間中から私が出した最近の二三本の手紙を貴女は読んでくれましたか？」

「ええ。」

「で、あの中の意志が通じましたか？」

「ええ。」

「解つて貰へればそれでもう僕は満足なんだ。僕はあれにも云つておいたやうに、もう全く貴女に對しては感謝の念より外にはないんだ。又夫れ以外の念を抱く権利は僕にはないことも知つてゐるんだ。そして今迄僕が貴女に煩はしたあらゆる迷惑や無禮に就いては僕は充分後悔してゐます。どうか其點は許して貰い度いんだ。」自分は赤面し乍ら思ひきつてかうもじ／＼云つた。

「別に何でもないぢやありませんか。妾何とも思つてやしないわ。」と彼女はビリ、と巾を引き裂きながら云つた。

「さうお？ほんとに僕は悪かつた。——」かう云つて自分は心の中に「御免なさい。さうしてもし出来るなら私の罪を忘れて下さい。蟲のいゝお願ですが。」とつぶやいた。

「だからもう何ともないのよ。何も心配することはないわ。」

俯向いてゐた彼女は笑ひながらかう云つて自分の顔を見た。自分は其頸に飛びつき度かつた。そして彼女の膝へでも胸へでも自分の顔を押しあて、それなり何處へなり吸はれてしまひ度く思つた。

「……しかし僕はたつた一言貴女の口から聞き度いことがあつたんだ。……しかしもう云はない方がいゝだらう。」

「なあに？」

「それは少し云ひ悪くいんです。元との私と今の私とは違ふもんで。又聞いた處で始まらないには始まらないんだ……。」

「だから何よ。」彼女はほぐしものをしてゐた手をじつと静めてかう詰つた。

「つまり私が唯一人だつた——と云ふこと……。」

「何が唯一人だつたんですつて？」

「眞當に唯一人の……。」

自分は何時の間にか緊張することを怖れてゐた。さうして彼女の長閑な温い心持に自分のそれを調和させやうと努めてゐた。

「え、分らないわ。」

「どうも口へ出して云ひ悪くいんだ。——もう止さう。貴女には大抵分つてゐるだらうから。」

「仰有いよ。」彼女は黙つてゐたが又かう呟いた。

「つまり貴女を——した……。」

「まあ……どう致しまして。」とSは脊り返へつて云つた。自分は彼女と同じやうに呆氣に取られたが、それから二人は暫く云ひ合つた。結局Sは

「そんなら貴方位に深く妾を愛した、又愛してゐる人が今も猶ほ二人ある。」と告げた。彼等の何れかに見込みがあるかと自分が訊ねると、「知らない。」とSは下を向いて微笑んだ。自分は思つた。つまりSの理知は恐らく自分の戀に他の男のよりもより多くの價値を認め

てはゐるが、只彼女の感情が殊に自分の前で、かりそめにもそんなことを發表することを固く禁ずるのであらう。で、彼女がもし他の男に向つてゐる時には比較的自分の戀を取り立て、云はないものでもない。と併しそんなことはもう仕うでもいゝのだ。結局同じことだ。」と自分は又思い直した。

暫くして自分が、昔の過ぎ去つたことはもう何もかも水に流してしまつて、又新たな何のわだかまりもない單なる友達として彼女に交際ふことを自分に許しては呉れまいかと訊ねると、Sは一寸言ひ淀むでゐたが

「え、もしそれが貴方に出来るならば。」と云つた。

「少くとも外面の上で僕が斷然さう努めてゐれば交際ふ上に別に差支へはないでしやう。」

「え、貴方にそれが出来れば。」Sは笑い乍らかう同じ答へを繰り返へした。

「出来ないと思ふの？」

「出来ると思ふの？」

「ふむ。」

こんな六ヶ敷いことがあるだらうか。しかしSは

「さうでなくつちやいやよ。出来ないに定まつてますけれど。」と云ひ足した。

自分は必ずさう云ふ風にやると誓つた。そして

「だから仕うかそれを許して下さい。貴女に仕うしても逢へないと云ふことは辛いことだ。だが林や、Iや、Tが自由に貴女に逢ふ権利を持つてゐて、彼等よりも何の位多く貴女の幸福を祈つてゐるか知れない私が、單に貴女を愛したと云ふ理由で貴女に會ふ資格を持つてゐないと云ふのは不合理だらうと思ふがな。」と附け加へた。

「オールライト。」

で、自分は再びSに接觸する権利を回復した。二人は打ち溶けて笑つた。

「あ、——面白いな。」暫くして自分はほく／＼し乍ら云つた。

「何が。」

「人生がさ。自分には別に何と云ふ意思もなく、しかし只冗談にはなくかう云つて微笑んだ。」

「餘り面白過ぎてもうつまらない。」とSは云つた。

「は、。」と自分は笑つた。そしてSと自分との間で人生をつまらながるものがSで、面白がるものが自分だと云ふことを面白く思つた。

「しかし兎に角一時は随分苦しい、悪い時もあつたが、又お仕舞いが始めのやうに美しくなれば結構だ。」自分がかう云ふと

「さあ美しくつても何でもよござんすからもう時間よ。」可愛い、Sはかう急ぎ立てた。

自分は後一分々々と云つて引き延ばしてゐたが、やがて十時半が来たので、自分はSの英國に立つ迄は金曜日晩に限つて彼女を訪ふとを約束して彼女の許を握手して去つた。

「あ、妙だ。實に不思議だ。俺は幸福だ。俺が誰より不幸だと云ふのだ。」
表へ出ると自分は外套の前を存分開放しにして、帽子を手に持ち、生温い春の夜風に

思いきりあほられて元氣よく歩き乍らかう口籠つた。

「變なもんだ。俺は嬉しくつて仕方がない。俺の中には新鮮なエナジーと希望とが充ち溢れてゐる。これが一舉兩得と云ふものだ。戀其物を獲ておいて、同時にSにも逢へて樂

めるのだから、これより感謝すべきことがあらうか。」

と自分は今迄何時も絶望に苦しみ、滅入りきつて乞食のやうに一寸宛歩いた此一道を、今宵は始めてすがすがしい自由な胸を抱いて威勢よく大股に歩いた。上には亂れた雲の走る天に祝福を思はせる春の月が心地よく輝いてゐた。

Sは春の中に英國に立つとは云つて居たが、何時頃とも判然云はなかつた。松子に訊いて見てもよくは判らなかつた。で、自分は殊によると彼女の英國行は偽ではないのか、或

は見合せになつたのではなからうか杯と疑つた。そしてそれが矢張り彼女の意志ではなくして、運命の寓意ではなからうかとも考へた。

此の頃又自分はSは實は此方にある好い執着があるのではないだらうかとも疑つたりした。そしてもう一遍始めから新機捲き直しに彼女に當るだけ當つて見やうか。そしてた。或は今度はいゝかも知れない。今迄のは彼女の自分に對する試みに過ぎなかつたかも知れぬと思つたりした。そして自分の中に一旦グウの音も出ない程に蹂み潰ぶされてゐたある力は再び勃然と頭を擡げて、潑刺と蕪生へつたのであつた。が、

「併し馬鹿。俺は今一體何う云ふ地位にゐる。何一つあのことに就いては語つてはならぬと云ふ厳しい條件の下に辛らく彼女を訪ねることを許されたばかりの身の上ではないか。」やがて又かう意識すると自分の漸く立ちかゝつた愚かな腰も宛ら水を打たれた火のやうに一堪りもなくすれて了ふのであつた。かくて自分は依然として惱み苦しむだ。

それから自分は當分の間大抵毎金曜日の晩にSを訪ねた。(しかしそれは早く飽きられる

と思つたので、後には二週間毎に訪問することになつた。

或時はロダンの寫眞帖を持つて行つてそれを彼女に送つたり、又或時はゴヤや、ルーベンスの繪を持つて行つては彼女に見せたり、ストリンドベルヒの脚本を貸したりした。(彼女はゴヤを大好きだと云つた。)

或晩Sは活花に使ふ桃の枝を自分に折つて呉れと云つて渡した。で、自分は満身の力を罩めてそれをへし折つた。其時自分は薬指の先を一寸怪我したので血が少し滲み出た。自分はそのそれを彼女に吸つて貰ひ度かつた。しかし彼女は其代りに晩息膏を持つて來て自分の舌で舐めてそれを張つて呉れた。自分はその膏薬を屢々接吻しては大切にしていゐたが、二三日して後風呂の中でうつつかりそれを剥がして失つて了つた。

併し實は彼女も自分にかう云ふ風にして會ふことを喜ぶ譯がなかつた。そして自分が彼女の傍にゐても滅多に自分に口を利かうとはせず、自分が持つて行く繪や本をばかり——恰度醫者の待合室で患者が手持無沙汰の餘りに止むなく新聞や雑誌を手にとるやうに——

見てゐた。殆んど一時間近くも全く無言である云ふことも稀ではなかつた。で、自分はもう仕舞には何も携えて行くことを止したが、それでも自分は彼女の前には何時も切ない窮屈と、壓迫と、頼りない隔りを感じた。實際それは堪え難い苦痛であつた。それで自分もかうして一旦戀人であつた人に、而も自分を弾ねつけた人に、單に表面上の友達として空々しく接して行くことは到底無理だと云ふことを又しても覺つた。

「貴女は僕とかうして交際してゐるのがそんなに厭ですか。」

或時自分は遂々かう訊ねた。

「いゝえ、別に……。」と彼女は例の如くしらへく答へた。しかし彼女がよし自分を嫌つてゐない迄も、自分に逢ふことを嫌つてゐたことは疑へない事實であつた。

四月の雑誌にはSこの事件を書いた自分の小説の第一回分が現はれた。「盲目の川」と云ふ題である。自分はこれを自家の者に餘り讀まれ度くなかつた。

處が八日の午後突然松子がやつて来て「盲目の川」を讀んで實に驚いた。自分が可哀相で

ならなくなつたと云つてオイ／＼泣き出した。自分も驚いたが、直ぐ又涙ぐんだ。

松子はさう云へばこんなこともあつた、あんなこともあつたと思ひ出し、Sのそばに就いて語つた。

松子は昨年さくねんの四五月頃、自分がよくSのことを何と云つてはほじくつて訊ねるので、或は自分がSを戀してゐるのではないかと一寸疑つたともあつたが、九月頃くわつごころから此方は全で氣がつかなくなつたと云つて今更のやうに不審がつてゐた。

嘗てSが松子まつこなんぞと一緒に高尾たかをに行つた時、松子が皆の前で「妾の叔父は何ですか大變貴女へんあなのことを褒めてよ。」と日本語で云つたらSは「松子さん。貴女あなたそんなことは後で仰おつしや有あいよ。」と嬉し相さうに云つて、後で二人丈ふたりだが一緒になつた時「松子さん、先刻さつぎのことなかに……。」と云つて尋ねたところか、又Sは自分の話が仲間の間あひだに出ると何時も少し顔色が變つたとか、又ある時且ときの家で松子が一同を一寸釣つて見やうと態わざと自分のことを悪く云つた時、Sは「だつて松子さん、貴女は叔父様おぢさんのことを何時もいゝ方だつて云つ

てゐらしつたぢやありませんか。」と強く反問したこともあるとかと松子は饒舌つた。

松子はそれから猶ほSが自分と彼女との間柄を松子が知つてゐはしないかと絶えず氣遣つてゐるらしく見へたと云ふことや、又此間林の家に松子とSとが彼の新婚を祝いがてらに行つた時、Sは途中若しや自分に林の處で逢ふやうになりはしないかと案じでもしたものか、俯向いて何となく鬱いでゐた容子であつたが、歸りには大そう元氣であつたと云ふことやを談した。そして若しSと自分が夫婦になつたならば、自分(松子)は什んなにか嬉しいだらう。又それは二人の爲めに屹度いゝのにと蔭乍ら思つてゐた杯と打ち開けて殘念がり、昨夜はあの小説を讀んだ爲めに徹夜泣き明したと云つて自分の爲めに悲しみ悔むだ。

自分は堪らない氣がした。そして心の中に松子の同情に感謝した。しかし松子が自分から受けとつたSからの最後の置手紙を讀み、そして

「まあなんて元山さんな残酷な人なんでしやう！」と云つて怒つた時には

「そんなことはないよ。」と云つて彼女をなだめた。

松子は普段到つて怒りつぽい、專横な氣性の自分がSに對しては些しも怒つてゐずに、却つて感謝の念を抱いてゐるのを知つて少からず腑に落ちないやうに不審がつてゐたが、又ほんとに事件は絶望なのだらうか、其處には一縷の望みも残つてゐないのだらうか、二三年待つたら又其中Sの氣が變つて來はしまいか、Sが出立を延引してゐるのは或はその心算ではないのだらうか杯と切りと思案して自分の肩を持つので、自分も仕舞には少し可笑しくなつた。

兎に角彼女は之れから自分は一體何うする心算だ。何うして暮して行く。嗚ぞ自分は哀しかつたらう。どんなに淋しかつたらう杯と無暗に自分に同情を寄せてゐたが、自分が自己の思いがけない立ち場を意識しつゝ、彼女に簡単に説き聽かせてやると、いくらか又安心したやうに

「でも妾矢つ張り元山さんは好きは好きなの。」なんぞと云つてゐた。自分は松子の無邪氣

を可愛く思い、笑い乍ら、心の中で竊かに涙ぐんでゐた。

「俺は幸福でない迄も別に不幸ではないよ。」と自分は微笑み乍ら云つた。

「成る程俺も今度のことぢや随分苦しみましたし、弱りもしたし、又此れから先きにもそれは大方續くだらうが、何しろ俺よりも何倍も偉い人が、又何倍も深い苦しみ方をしてゐるのだからな。」

こんなことを自分が獨り語のやうに云ふと、松子はじつとして聞いてゐたが、

「それやさうかも知れないけれど、でもあんまりですわ……。」と云ふやうなことを云つて、やがて又自分に熱い同情を寄せて歸つて行つた。

彼女の去つた後で自分は又一人Sのことを考えた。そして自分が結局Sから愛された、無限の愛を受けたと云ふ氣が強くなって、「有り難い。勿體ない。」と云ふ感謝の喜びに自分の切ない胸は又も涙で一杯になつた。

翌日は金曜日であつた。自分は例の如く樂み勇んでSを訪ねた。時刻は例もよりも少し

後れてゐた。しかしSは朝から不在であつた。自分の送つた葉書も彼女は見ずに出たのであつた。自分は玄關に腰を卸して暫く待つた後で、自分の出した葉書を「セキ」から受け取り、それに何か書かうとして見たが又厭になつてそれを破り棄てた。そして自分が落膽しきつて其處を去らうとした時、門の處でハタとSに行き逢つた。其の自分を認められた瞬間に彼女のがつかりし方は極度に露骨であつた。門の中へ足を踏み入れやうとしてゐた彼女は無言の儘「あ、いやだ。」と思はず息を引き取るやうな苦し氣な表情をし乍ら右手を額に當て、一歩後へ退いた。眞個くその極度に現はされた不快と、失望との様子は自分乍ら見てゐる氣の毒になつた程であつた。二人は其儘暫く——一人は門の外に、一人は門の内に——じつと佇んでゐたが、其時の自分の失望と苦痛とは到底Sのそれに劣るものではなかつた。併し自分は折り入つて頼んで一寸の間上ることを彼女に許して貰つた。

彼女はかれこれ一時間も待たせた後で一寸自分に會つた。しかし殆んど口は利かなかつた。彼女は此晩再び「自分に逢ふとは矢つ張り厭だ。もうなるべく來て呉れるな。其方が

自分の爲めにもよからう。」と云い出した。自分はつくづく彼女が何處迄自分を嫌いなのか分らぬと思ひ乍ら、而も自分から不快と悩みを受け、彼女に心底から同情した。そして自分が若し眞に彼女を愛してゐるならば、彼女の爲めに自分は彼女の厭がるやうなことを一切してはならぬ。自分は彼女の爲めには自分の如何なる寂しさや、苦痛をも承へなければならぬ筈だと思つた。

歸り路に自分は春の朧月に蒼白い夢のやうに霞む青山の墓地を抜け乍ら何心なく犬のやうに吠へた。其聲は自分乍ら幽霊の聲のやうに物凄く聞こえた。自分は戦慄して走つた。

其後自分はつとつとSを訪ねなかつた。そして苦しみ乍ら一心に小説の先を書き續けることに生活を集中した。

小説の筋は此處で一寸妙なものになる。實は三月に入つて自分の脚本「二週間」を読んで感動したある女が、恰度嘗て自分がSに申話しに語つた場合のやうに、自分に交渉をし

かけてきた。此女は二三年も前から自分を見知つてゐた相だ。併しSに對する比較的靜かな信仰的愛着の心持と、漸く落付きかゝつて來た創作的精神との平安を保つてゐた。此頃の自分は、それにかまけることを厭がり、避けてゐた。女は執拗に自分に迫つて來た。それはまがいがもなく戀であつた。——で自分は遂々止むなくその女に會つた。しかし自分は仕うしても其女に心を惹かれることが出來ずに、遂に「愛し得ないものからしつく慕はれるもの」の同情と、煩はしさを以て此方から其交渉を斷絶させて了つた。處が四月の末又一人の若い女が出た。其女は先方から自分に直接な交渉をしかけて來たのではなしに、話は前田の細君から自分に取次がれたのであつた。併し此女は「盲目の川」を読んで自分に強い厚意と尊敬とを抱いてゐた。自分は最初矢張り此女に接觸しやうとは欲しなかつた。寧ろ自分は此話を持ち出された時、自分の現在の心持と、何事に依らず他人を中間に立てることをヒドク嫌ふ自分の性格とを解し方が足りないと思ふので、前田の細君にある不快をさへ感じた程であつた。

併し此三番目に現はれて来た女は或は自分の女性に對する運命を解決する宿命的任務を持つてゐるものではなからうかと云ふやうな疑惑も實は心私かに無いこともなかつた。自分が矢張り此方から積局的に此女に逢ふことによつて又新たな女性との交渉を開始しやうとする欲望はなかつた。又色々の意味でそれを恐れてゐた。それ故自分は此女に逢ふことを斷つた。

それにも拘はらず自分は、とう／＼ある晩、ある處で、此未見の女と氣輕に會ふ丈け會つて見る事になつた。すると其席には四五人の男女が集まつてゐて、自分と此女とは遂に一言も、否一度の視線をも眞向に交はすことがなかつたに拘はらず、自分は其晩自家に歸る途中で自分がつきり此女への戀に陥つたことを自覺しない譯には行かなかつた。で、其晩自分は一睡も眠ることが出来なかつた。處が其女も矢張り此晩一睡もしなかつた。此女は自分を戀したのであつた。

二人は激烈な戀に陥つた。今度は何方がアクティヴで、何方がパッシヴと云ふこと

もなかつた。此女の性質はSのとは全く異つてゐたに拘はらず、二人の凡てのことはSの場合とは正反對に不思議な程正比例して一分の隙間なくピッタリ／＼調和して抱き合つた。女は自分を弾ねつけるもの、自分を嫌ふものと云ふ觀念が、殊にSとの經驗以來、何と云ふことなしに一種いこいな先入主となつてゐた自分には、全くそれは不思議以上の只々驚くべき奇蹟であつた。彼女の愛は自分の如何なる邪推や疑いをも超へて大きかつた。自分には有頂天に歡んだ。そして此新しい戀人を善と美との權化として天使のやうに思い崇めると同時に、一方前田の細君にも心から深く感謝した。結局二人は正式に結婚することになつた。女の名前は静子と云ふ。年はSよりも二つ下であるが、頭文字は矢張りSである。静子を戀するやうになると同時にSに對する戀は一時頓と冷却して来た。それは全く淡い過去の夢に思へて来た。のみならず自分の愛する静子が同じやうに強く自分を愛するにつけて、自分はSからの虐待を思つた。そして一時はSを恨み、憎く／＼さへ思つた。實は一種の復讐心さへSに對して自分の中に湧き上つた程であつた。

併しある晩總領の姉が来て、母に——勿論此姉は自分がSを知つてゐやうとも、又猶更戀したことがあらう杯とは夢にも知らず——ヒドクSの悪口をした時、自分は到底黙つて聞いてはゐられなくなつて激怒した。姉は松子がSのやうな「あばずれ女」と交際ふことをも非難した。

「そのあばずれ女の元山と僕は結婚しようと思つてゐたんだ。」

かう自分は突然横から口を挟んだ。が、姉はよく合點が行かなかつたと見へて、未だ何とかと讒訴を續けた。

「其元山が僕の戀人だつたと云ふのだ。」

自分は恐ろしく激昂して又かう呶鳴るやうに云い放つた。自分は姉と爭論をした。そして姉をヒドク罵つた。母が蒼い顔をしてそれを仲裁した。それから自分が二階に上つた後で姉は泣いた相だ。

此姉は既に静子と自分が結婚することを知つてゐて、寧ろ——静子の寫真を見たので

——ある意味から此結婚には賛成してゐたのであつた。そして静子のやうなものを貰へば、Sと一緒にゐるよりかも、先々の爲めに何れ位自分にとつて幸福かも知れないと云つた。母も略々それに同感であつた。しかし自分は「そんなことは何方にしても他人の口を出すべき處でない。」と云つて未だ怒つた。

併し自分は此事で始めてSが世間では評判がよくないと云ふことを知つた。そして一方から云ふとそれも不思議はないことだと思ひ乍ら、Sに同情した。縦令馬鹿な世間の悉くが何と彼女を非難しやうとも、少くとも自分だけはSの味方だ。永遠の味方だと思つた。静子とは繁く交際つた。そして二人の戀は恰度乾枯びた凸凹した河床の上を押し流す奔流のやうにどん／＼發展した。事件も先づそれに伴つて進んだ。

五月に入つてある晩松子が尋ねて來た。松子はSが近々の中に立つやうになつたことを自分に知らせた。そしてSが「盲目の川」を自分が書いてゐることを何處からか聞き知つて、それを松子から讀んで聞かせて貰つた時、彼女はじつと額に手を當て、熱心に聴いて

ゐたが、ある處迄來ると深い溜息を吐き乍ら「もう止して頂戴。」と云つたとか、自分の話が出る。「もう其話は止しにしましやうね。」と云い乍ら實はまんざら止し度くばかりもないやうであつたとか、自分に對してSが抱いてゐた感情は始めから終り迄憐憫と同情とであつたと松子に打ち開けたこと杯を話した。

松子は猶ほ自分が一寸そのことを彼女に洩らしたことがあるので、姉と自分がSのことで云い合つたことをSに告げたらSは満足氣に

「矢つ張り敵ぢやないな。」と呟いたと云ふことを自分に語り、そしてSは少くとも近頃では確かに自分に厚意があると云ふことを斷言した。

自分の心持は複雑を極めてゐた。「どうして敵だなんて……そんなことが……。」と自分は思つた。自分は此時二個のSを戀してゐた。同じやうに？うむ、性質は異つても恐らく同じ分量に。自分の心は二人に對する苛責の思ひに亂れてゐた。しかし自分は最う以前のやうに心細くはなかつた。

其後自分は又Hが支那から一時的に歸つて來たと云ふと、HとSとの間柄は眞個く並一通りの仲ではないと云ふこと、それから又BはSの戀人ではなかつたが、SはBの戀人であつた。矢張り去年の秋頃から。と云ふやうなこと（此最後の事實はSが松子に内證で打ち明けたのである。）をも松子を通して知つたのであつた。

Sは遂に五月三十一日、春の最終の日に西北利亞經由日本を去ることになつた。此時は恰度静子がN市に結婚の仕度の爲めに歸郷してゐた時であつた。

自分はSを送らうか送るまいかと迷つた。彼女は此日出發することを餘り人に知らさず、誰にも見送りに來ることは斷つてゐると云ふことを自分は聞き知つてゐた。それ故彼女に不快を與へてゐる自分杯が送りに行つた處で、別れの挨拶を一つ交はすことすら出來るか出來ないか分らぬと自分は思つてゐた。又自分は一方静子に對してもそれを憚る氣になつた。静子は自分がSの出立が近々の中であると云ふことを告げた時、「送つていらつしやい。」と

は云つてゐたが、素よりそれを喜ばう筈はなかつた。Sの荷拵らへを世話し旁々毎日Sを訪ねてゐた松子も、それが餘りに辛ら過ぎると云ふので、此日の見送りには來ないと云ふSとの約束になつてゐた。

併し實は自分はSを送りたかつた。自分は彼女に逢ふことを恐れてはゐたが、此自分にとつて容易ならぬ永遠の因縁と思惠を持つ戀人を、この或は長の別れに際して、一目なりとも見送つておき度く思つた。又その義務が自分にあるやうにも感せられた。のみならずSに自分が彼女を忘れてゐるやうに、或は反感を抱いてゐるやうに思はれては浮ぶ瀬がないとも思つてゐた。で、自分はこんな手紙を認めた。

「わが永遠の人よ

私は今日の午後此處に貴女を見送りに來ることに大變躊躇しました。何となくそれが怖ろしかつたからです。併し私は結局來ずにはゐられなくなりました。ある義務の觀念と、私の貴女に對する變るとなき愛の熱情とが私をそれに驅り立てたからです。私は今更もう

何も云ふことはありません。實は有り過ぎて云ふことが出來ないのかも知れません。私の頭と胸とは餘りに單純で又餘りに混亂してゐます。私は貴女に謝罪すべき、又感謝すべき餘りに多くのものを持ち過ぎてゐる。何うか私の貴女に對する永久不變な愛と、誠實な感謝とを疑はないで下さい。私のやうな罪深い、ならずものの上に過分の愛と惠みとを垂れて下さつた崇高い人よ。私は恩知らずではありません。貴女が英國に居られやうと日本に居られやうと、貴女の境遇が縦令什んな風に變化しやうとしまいと、私にとつての貴女は所詮何時も同じだ。貴女は私の人生に最も光榮ある記念すべき祝福を垂れて下さつたかの偉大なる初めての女性だ。何うか何時迄も幸福で、御壯健でお居でなさい。私は神かけてそれを祈る。そして私の終始易らざる愛を忘れないで下さい。少くとも一年に一度でももし貴女が私のことを思い出して下さつたならば、私はもうそれで實に満足です。貴女の私に遺して下さつた美しく、傷ましい記念は永遠に私の上に深い拍車を當て、私を死に至る迄前へ前へと驅り立てるでしやう。

何時の日か、又世界の何處かで、再び貴女に見へる光榮の日を期して

さらば御機嫌よく。Y・N

此手紙を懷中にして自分は午後三時五十分發の急行車を見送るべく新橋に向つた。

停車場は非常な雑沓であつた。プラットホームに入つた時自分はSの弟を見た。すると自分は俄かにある恐怖に襲はれ出した。そして自分が到底Sに會ふ勇氣のないことを覺つた。自分は人込みの中をSに認められることを氣遣い乍らキョロ／＼して歩いた。見付かつたらどんなに厚かましく厭に思はれるだらう。蔑まれるだらう。こんな氣が切りとした。「だが仕うせ俺は會はないでもないのだ。強いて其必要はない。手紙杯は猶更仕うでもない。只一目でも遠くからあの人の姿を拜めばいいのだ。それでもう充分だ。」かう自分は思つた。そしていくらか落ち付くことが出来た。眞個くそれは見ると云ふよりも「拜む」と云ふ心持であつた。

長い汽車を一通り後ろから前端迄見通したがSの影は何處にも見へなかつた。其處で引

き返へして又後ろ迄來ると、近くに先前見たSの弟や、又其周圍に年頃四十前後のSの阿母さんらしい人が二三人の婦人と立ち談しをしてゐるのが見當つた。此處だと思ひ乍ら其あたりを見廻はし、更に客車の中を覗いたが矢張りSはゐなかつた。

其處へ背の高いLが夫婦でやつて來て、Sの阿母さんらしい人から何かと訊いてゐたが、それなり前の方へ走つて行つた。

暫くすると一旦見へなくなつたLが悠つくり前の方から此方へ歩いて來るのが見へた。そして其傍にはSと、外に見知らない若い女が二人ばかりゐた。其瞬間に自分はドキリとして思はず顔を赭らめ乍らあはて、人込みの中に隠れた。

自分の眼の前二三歩の處を花束を持つたSが白い夏服を着て微笑み乍ら通つて行つた。と、自分の頭は自づと顔を隠すやうに下を向いたが、Sは此方を認めたやうでもあり、又認めないやうでもあつた。兎に角自分は到底彼女には近附き得ないことを感じた。手紙を渡したり、談したりすることは、殊にこの衆目の中では以ての外だと思つた。併し自分は

「もう之れで一目でもSを見たからいゝ。思い残すことはない。俺は只遠くから彼女を見送つて、心の中に彼女の健在と幸福とを祈つてゐればいゝのだ。」かう思い乍ら遠くに隔つて、人込みの中に一人つくぬんと立つてゐた。

出發の時刻は最早二三分にさし迫つた。と、ぼんやり立つてゐる自分の腕を突然後ろからギユツと握り締めたものがあつた。はつと振り向くと其處にSが立つてゐた。自分の驚きは非常であつた。併し自分の口は啞であつた。自分は只ぼかんとして訝かし氣に彼女を視てゐた。

「さ、よ、な、ら。」

と彼女は一言々に押し詰るやうな力を籠めてしつかり云つた。併し其聲は顫へて、嚴として和らいだ顔は蒼かつた。自分は氣が遠くなるやうに感じ乍ら慌て、帽子を取り、そして無言の儘彼女の差し出した手を怖るゝ握つた。其手は冷たいやうであつた。

「御機嫌よう。」と彼女は云つた。

併し自分の口は依然として啞であつた。で、自分がぼかんとしてまんじりともせず彼女の顔を凝視してゐる間に、Sは再び雑沓の中に隠れて了つた。自分は何だかさつぱり譯が分らなかつた。只ヒドク惜しいやうな好い氣持が體中を熱く冷たく流れた。

二三分経つた。鐘が鳴り、汽笛が聞こえた。そして汽車は静々と動き出した。彼方此方で見送りの群衆が一步後へ退つて、車中の人と別れの辭を交はし合つてゐるのがガヤ／＼と耳に響いた。車はそろ／＼自分の前を通つた。Sの確かにゐる筈の窓が來た。しかし其處には弟の顔丈けしか見へなかつた。「おやあの人は隠れたのかな。」と自分が思ふ暇に車臺のプラットフォームが來た。其處にSが片手で鐵の柱に握まり乍ら立つてゐた。彼女は自分を見出すと急ぐやうにこごんで自分の方に肘迄の長い白手袋を嵌めた腕を差し延ばした。汽車はズン／＼走り出してゐた。

「アッ。」と思ひ乍ら自分は慌て、前にゐる人を押し退け後から追いかけて行つて其手をやうやく一握り握つた。(此時の感じには何處か恰度始めて耳の處で彼女の手を握つた時のそ

れに似通つたものがあつた。

「さよなら！」

「さよなら！」

自分は立ち止まらなければならなかつた。「いつそ死ぬのなら此車に轢かれて死に度いものだ。」こんな思い付きがチラリと自分の念頭を掠めた。(併しさう思はせたものは實感と云ふよりも、寧ろ只コンゼンションであつた。)そして汽車はSを載せて遠慮なく去つて行つて了つた。手紙は無駄になつた。

それから三十分餘りを自分は停車場の待合室で呆然と過した。

「若しあの時誰か来て俺を殺さうとでもしたならば、恐らくSは俺を庇つて「此人を殺してはいけません。」と云つて呉れたに違いない。」こんなことも自分は思つた。

自分は今此時の自分の心持を殊更説明する困難を省かうと思ふ。が、自分は泣きはしなかつた。

兎に角自分は此時自分の生活の重なる中心を除き去つて了はれたやうな恐ろしい空虚と、もうこれで何もかも全く畢り告げたと云ふ頼りない寂寞とを感じる。と共に、自分が如何に強くSを戀してゐたか、又あるかと云ふことを今更のやうに自覺した。そして自分は今日、此最後の別れの日、始めてSから厚意と同情とを示された氣がした。そして自分の眞意が遂に彼女に達したことを喜びつつ彼女に感謝し、又彼女の繁榮を祈つた。

Sは併し一人で歸つた譯ではなかつた。東京から一緒に立つことを憚つて、宮島で彼女を待ち合はせてゐる日と落ち合つて、長い道中を共にする手筈になつてゐたのである。

自分の悲痛と寂寥と、及び彼女に對する今更の憧憬の念とは、併し乍ら、今一人の戀人妻となるべきの静子の存在によつて頃合の程度迄弱められた。自分が如何に静子を愛し、又静子が如何に自分を愛してゐるかは、恐らく二人の自覺以上であらうと思ふ。

六月初旬、ある蒸し暑い夏の夕べ、自分は静子と婚姻の式を擧げた。簡單に、併し正

式に。婚禮の晩直ちに自分等は楽しい新婚旅行に出掛け、それから三日許りして歸つて来た。そして今は東京の郊外に二人で別居してゐる。

Sと云ふ親友を失つた松子は今度は静子と云ふ新たな親友を得て喜んでゐる。

ある日静子が自分の蔭でSのことを松子からほじくつて訊ねた時、松子は

「妾でなければ夜も日も明けないうやうなことを云つておき乍ら、そのそばから直ぐもう他の人と結婚なんぞするんだもの。堪まりやあしない。」こんなことをSは松子から自分が静子と結婚するやうになつたことを聞いた時、笑い乍ら云つてゐたと語つた相である。

自分が林からLに聞いたと云つて、且夫人が近頃非常に孤獨を感じて悩むのである相だと云ふことを聞き知つたのは近頃のことである。

静子との結婚生活の上にも、前に戀人を持つてゐた一方を持つ戀仲の夫婦が屢々惹き起こす罪のない、併し満更馬鹿にも出来ない悶着が擡がることは折々免れない運命であるが、それも結局日常生活の餘興以上に無益なものではない。Sを戀して、Sを失つたが故に

静子を得たとは自分にとつて實に思いがけない運命であつたと云はねばならぬ。何故ならば自分が若し「盲目の川」を書かなかつたならば、恐らく静子は自分の處には來なかつたからである。して見れば「汝が最愛する處のものを失ふは更に他のものを愛せんが爲めである。」と云ふマーカス・アウレリウスの言葉にも矢張り相當の權威はある。と自分は思つた。

静子は自分にとつて第三の母となつた。

自分の寂しさは既になくなつたか？ 然り、一部分は。だが其他は？ ——それはよしSを獲たにしても恐らく静子以上に埋めることは出来ない自分生得の附ものである。

Sは六月の下旬無事倫敦に着いた相である。

(盲目の川畢り) 千九百十四年八月二十四日。攔筆

同 十月二十三日。校了

大正三年十一月八日印刷
大正三年十一月十一日發行

定價金壹圓參拾錢

盲 目 の 川
奧 付
不 許 複 製

著 者 長 興 善 郎

發 行 者 東 京 市 麴 町 區 平 河 町 五 丁 目 卅 六 番 地
河 本 龜 之 助

印 刷 者 東 京 市 麴 町 區 平 河 町 五 丁 目 卅 六 番 地
河 本 俊 三

印 刷 所 東 京 市 麴 町 區 麴 町 二 丁 目 九 番 地
洛 陽 堂 印 刷 所

發 行 所

電 話 番 町 四 二 五 八 番
振 替 東 京 二 〇 九 一 四

東 京 市 麴 町 區
洛 陽 堂
平 河 町 五 丁 目 卅 六 番 地

武者小路實篤著	武者小路實篤著	志賀直哉著	武者小路實篤著	武者小路實篤著	有島生馬著	小泉鐵譯	木下利玄著	柳宗悅著	柳宗悅著
△お目出度き人	△世間知らず	△留女	△心と	△生	△蝙蝠の如く	△ノア	△銀	△井リアム・ブレイク	△井リアム・ブレイク
(小説)	(小説)	(小説)	(脚本)	(感想)	(小説)	(評傳)	(詩集)	(評傳)	(評傳)
定價六拾錢	定價八拾錢	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓貳拾錢	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓	定價壹圓
									近刊
~~~~~									
東京市麹町區六三ノ五 東河平 洛陽堂 振替 東一〇九 京四一									



大正三年十二月

渡邊義治



